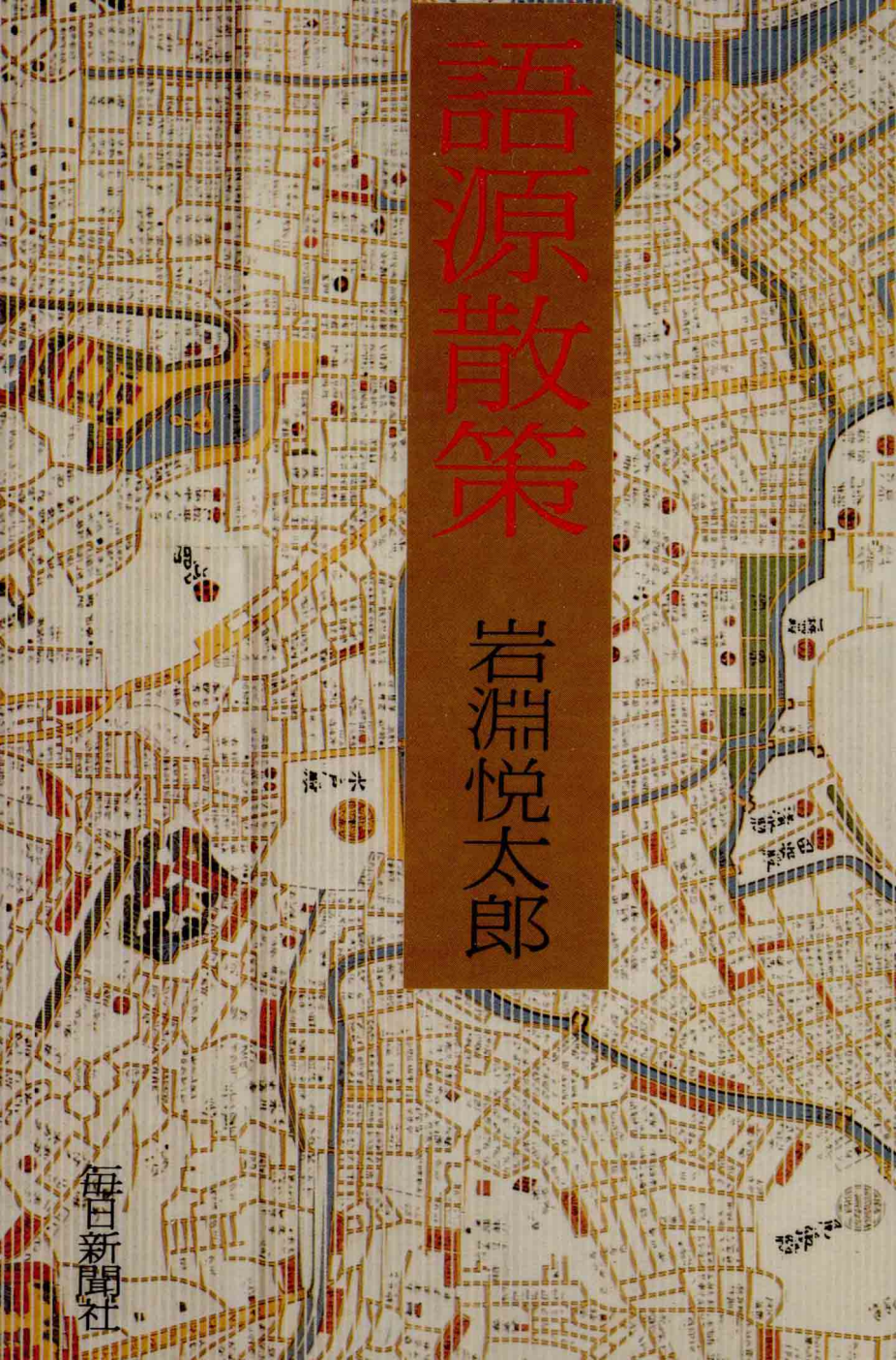


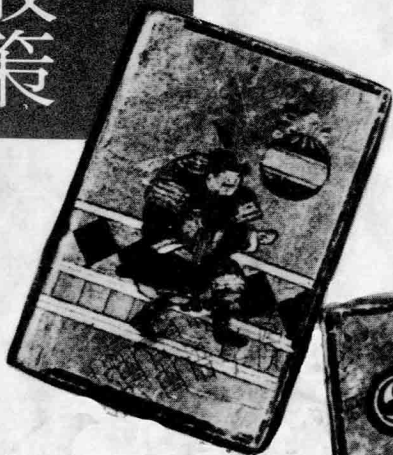
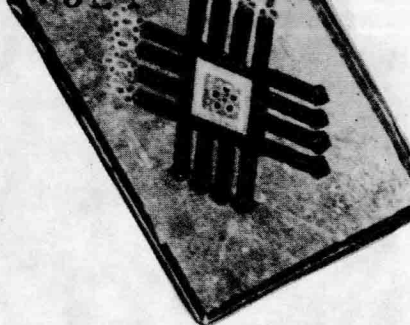


語源散策

岩淵悦太郎

毎日新聞社

語源散策



毎日新聞社

著者略歴

1905年 福島県白河市に生まれる

1930年 東京大学文学部卒業

専攻 国語学

現在 国立国語研究所長

主な著書 「国語概説」(学芸図書)「現代の言葉」(講談社)
「現代日本語」(筑摩書房)「国語の心」(毎日新聞社)

語源散策

定価九八〇円

昭和四十九年十月三十日 第一刷

昭和五十年二月十五日 第六刷

著者 岩淵悦太郎

編集人 桑原隆次郎

発行人 伊奈 一男

発行所 毎日新聞社

東京都千代田区一ツ橋

大阪市北区堂島

北九州市小倉北区紺屋町

名古屋市中村区堀内町

印刷 図書印刷

製本 大工製本

〈検印省略〉

0095—500250—7904

目次

アカヌケ アゲクノハテ アホウ アリガトウ 哀れと天晴 イ
 カサマとイカモノ ウオとサカナ うつくしい 五月蠅いと八釜
 しい 遠慮・勉強・馳走 おいそれと おあいそ 老いらくの恋
 岡目八目 小田原評定と井戸端会議 カゲンとアンバイ 菓子
 とくだもの かけこみ カツグ カツコウ 勝手 ガツテン・ガ
 テン カツボウとリョウリ かなしい 牛鍋とスキヤキ キノド
 クとキザ キリヨウ クサイとニオウ 草野球 雲助 ケイコと
 コツケイ ケガの功名 下戸と上戸 月下氷人 結構です 現金
 な男 シモタ屋 ジャジャ馬 シヤツポを脱ぐ 笑止 所帯くず
 し 白魚 シンドい セワ タクとニル 他山の石 駄賃・駄目
 ・無駄 だてめがね 堪能 デキルとデル 手前味噌 デメン・
 デメントリ テレル 共食い倒れ・甘ったれん坊 ドンブリ勘定

なまけ者のセツクばたらき ニユウパイとサツキバレ ノキナ
ミとゴボウヌキ バカ ひもじい ヒヨリ ぶきつちよ・器用貧
乏 へどろ 物騒と出張 水かけ論 めでたい ヤニワに 藪医
者 らく日 リコウとカシコイ ルスにする ろくでなし ロハ
台 ワカルとコトワル

「えと」について 187

十二支散策 193

子年 丑年 寅年 卯年 辰年 巳年 午年 未年 申年 酉年
戌年 亥年

あとがき 244

装幀 安彦勝博

語
源
散
策

語源をさぐる

「お祭の準備でオオワラワだ」などというのを、しばしば耳にする。このオオワラワは新聞などでは「大童」と書いている。これは、もともとは戦陣などで奮闘して、頭髮の毛どりが解けてばらばらになったことを意味した語である。髪がばらばらになって、ちょうど、子供すなわち「わらわ」の頭の髪のような状態になるので「大わらわ」という表現が生れたのである。

「だれかのさしがねに違いない」などという「さしがね」は、元来、劇場の舞台で、見物人に見えないようにして陰から蝶や鳥などをあやつる針金のことである。思うように立身出来ないのを「うだつがあがらぬ」と言うが、この「うだつ」は、はりの上に立てて棟木を支える短い柱のことで、これが立たなければ屋根がつけられないところから来た表現である。「どき回り」というのは、劇団などが地方を興行して歩くことだが、もともと江戸時代末に、賭場に手入れのあることをドサと言った。当時ばくちの現行犯は佐渡へ島送りになったので、そのサドをさかさにしてドサとしたのである。やくざなどの社会の言葉には、タネ（種）をネタのようにさかさにした隠語が多く使われている。その佐渡への島送りのように遠方に旅興行をして歩くと

いうので「どき回り」が生れたのだと言う。暉峻康隆氏の説である。

このように、その語の起りがわかると、なるほどと思われて興味がつきない。

近年出来た語、たとえば「哲学」「映画」「放送」などという語の中には、だれが最初に使ったかを明かに出来るものもある。しかし、古くから使われて来た語には、その語源が何であるかを知ることの難しいものが多い。なぜ松を「まつ」と言うのか、山を「やま」と言うのかと言われてもどうもはつきりしないことが多い。ただし、説明のつくものもないではない。鶏の古名「かけ」は、鶏の鳴き声をもとにしたものではないかと思われる。生物など、その鳴き声、すなわち擬声語をもとにして名付けるということは容易に納得出来ることである。今でも「すいっちゅ」「がちゃがちゃ」などというのが一般に行われている。

古く外国から入ったものもある。紙はカミと言うが、これは中国語の「簡」が日本語になったものと言われている。「簡」はもともと竹の札の意である。紙の作られる以前は竹や木の札を使ったので、紙が出来てから後までも「簡」の字は「書簡」などとして使われた。ところで「簡」の中国語の発音は、最後がm音で終るので、わが国ではそれに母音を付けてカミとしたのである。紙は中国から伝わったのであるから品物と一緒にそれを表わす語もわが国に入ったと言える。同じようなものに「馬」がある。「馬」そのものも中国から入って来たものであるから、それを表わすウマという語も中国語から日本語に入ったものと見る事が出来る。

「なべ(鍋)」「こけ(苔)」「さかな(魚)」などは、実は二つの語が複合して出来たものである。

る。「な」は元来、酒や飯に添えて食べる物の称である。また、水や食べ物を入れるものを「へ」と称した。この「な」と「へ」の熟合したのが「なべ」である。「さかな」は、この「な」に「さか(酒)」が付いて出来た語である。「こけ」は「こ(木)」と「け(毛)」との複合したものである。「たらい(鹽)」は、「て(手)」と「あらひ(洗ひ)」とが複合したもので、「てあ」がつまって「た」になった。「おもちゃ(玩具)」も、「持て遊び」の省略形で、「もてあ」がつまって「もちや」になり、それに敬語の接頭語「お」が付いて「おもちゃ」となったものである。「たらい」や「おもちゃ」のように、語形が変化したために、もとの形のわからなくなったものも少なくない。

今「ジョウト(譲渡)」という語が行われているが、本来は「ゆずりわたし」であって、これを漢字で「譲渡」と書いたために、ジョウトという新しい語形が生れたのである。初めてのお客をイチゲンの客と言うが、これは「一見」と書く。「見」の字にはケンという音のほかにゲンというのがある。それをこのごろ、イチゲンというものだから「一現」と書いたものも見受けられる。

「坊主」は今、僧の意味に使われるが、もとは一坊(「坊」は僧の住む建物の意)の主ということで、身分の高い僧を意味したのが、僧一般の称となった。この「坊主」の場合のように意味が原義より広くなることがある。一方「ころも」は、元来身をおおう衣服のことであるが、それが今では、普通、僧の着る法衣を意味する。言わば意味が狭くなったものである。

「うつくしい」は、今では美麗の意だが、元来は、かわいい、愛すべきの意であった。今では、かわいい、愛すべきの意には使わない。意味が転じたのである。明治時代「くるまを拾う」と言えば人力車のことであったが、今では自動車のことである。時代によってさす内容の変わって来ることがある。

民間語源説 (Volksetymologie) というのがある。語源俗解とも訳す。われわれは、学問的な研究に基づいたものではなくて、自分だけでその語の語源を意識したり、その場の思い付きで語源を推測することがある。子供の例だが、何か気に入らないことがあって、「ハンストをする」と言う。「ハンストってどういうことか知っているか」と尋ねると、「半分ストライキをすることだろう」と言う。「いやハンガーストライキで食べ物を食べないことだ」と言うのと、「そんならやめだ」とたちまちハンスト宣言を撤回してしまった。この場合などは、個人的な判断に過ぎないが、それがある程度社会の通念のようなものとして民間で広く行われることがある。これが民間語源説である。野球のゴロは *grinder* から出たものと言われるが、一般には、ゴロゴロと球がころがるからと考えられている。明治時代に、停車場をステンシヨと称した。本来はステーションだが、「○○所」のシヨを連想して、ステンシヨとしてしまったものである。幕末から明治初期にコレラをコロリと称したのも、コレラにかかると、ころりと死んでしまうからである。大阪あたりでは、煙突のことを「エンタツ」と言うが、これは、煙突は高く立っているから、「立つ」を連想してエンタツにしまったものである。

「ほくら（黒子）」の古名はハハクソである。そのハハクソが時代の変化と共にハワクソとなりホクソとなった。「ほくら」は黒いものだから、黒を連想してホクソがホクロに転じたのである。日やといの人夫を、北海道でデメンと言っている。北海道では day head だと信じられているらしい。しかし、これは「出面（でづら）」から転じたものである。「デッドロックに乗り上げる」と言われることがある。しかし、デッドロックは、deadlock であり lock は錠前のことである。だから「デッドロックに乗り上げる」という言い方はおかしい。ロックには岩（岩）があるので、暗礁と誤解して「デッドロックに乗り上げる」と言い始めたのかも知れない。

一般にわれわれの生活では、外国語を取り入れて使うことが少なくないが、時にはその意味が変ってしまうことがある。ボーイはわが国では「給仕」の意で取り入れたものだから、「女ボーイ入用」とか「男ボーイ入用」というような求人広告が出たりする。ヌーボーは本来 nouveau（フランス語）で、新しいという意だが、その音の感覚から、ぼうとしていてつかみどころのないことを意味した。停車場を「駅」と言うが、これは元来「うまや」の意で、街道の所々に設けて、旅をする人のために馬などを供給した所である。それを明治時代に鉄道が生れてから、停車場に「新橋駅」とか「横浜駅」とか名付けたのである。駐車禁止の立て札に、「駐」の字を馬偏ではなく車偏にしたものがあつた。自動車の駐車を禁ずるのだから、馬偏ではおかしいと考えたものであろう。

われわれが言葉を使う際に、語源や字源まで明かにしなければならないということはない。言葉は時代と共に変化して行くので、語源や字源の通りには使わないこともある。むしろ大切なのは、その時代におけるその語の本義であらう。言葉を正しく使うことは、その本義に基づいて使うということである。しかし、その語の用法が社会的に混乱してしまったというような場合には、語源や字源を明かにしてその語の用法を定めることが必要になって来ることもある。

語源散策

アカヌケ

「あかぬけた女」「あかぬけたやり方」などと言う「アカヌケ」は、言うまでもなく、都会風に洗練され、いきなことの意味である。そして、この語の本来の意は「垢が抜けること」とと解されている。

ところで、他方、「あくの強い男」「あくの強い文章」などという言い方がある。この「あくの強い」は、どぎつい、個性的というほどの意であらう。

今、方言にも残っているが、アクは灰のことを言う。そして灰を水に浸して採ったうわずみのことをもアクと言い、着物の垢や脂を洗い落したり、物を染めたりするのに使った。一方、植物類に含まれている渋みやえがらっぱさのある液もアクと言った。そして、ほうれん草やごぼうなどは、そのアクが強いものと言われている。性質や文章などにどぎつさのあることを「あくが強い」と言うのも、この植物類に含まれるアクのことから出た表現であることは言うまでもなさそうだ。

ほうれん草やごぼうのようなアクの強い食物は、そのアクを抜かなければ食用にはならない。

いわゆるアク抜きをして食べる。戦後の食糧難時代に、食べられる野草を植物学者に教えてもらった。十分にアク抜きをしたつもりだったが、どうしてもものを通らなかつた記憶がある。

野菜類のアクを抜けば、渋味やえがらっぽさがなくなつて、味は、さっぱりとする。そこで、

あくのぬけた人だから、気めえが能いよ（『浮世風呂』）

のような比喩的用法が現われた。この『浮世風呂』の「アクのぬける」に対しては、『大日本国語辞典』では、淡泊だ、さっぱりとしているの意としている。『大言海』には、「人ノ気性ニ、俗氣ナキヲ、あくの脱けた人ト云フ」とある。ところで、『大日本国語辞典』では、淡泊の意のほかに、いなくさくさくないこと、やぼくさくさくないことを意味するとしている。そうすると、現在「あかぬけした女」などの「アカヌケ」の意味と、この「アクヌケ」と、大体同じような意味を表わすと言えそうだ。

「アカヌケ」が「垢が抜ける」ことと言われていることは前にも述べたが、近松の『心中万草』に、

そのぶんではうろんな。こちの人、むすめがあかをぬかつしやれ、うろたへてむすめひとりすてさつしやるな、これこれ

というのがある。この「あかをぬかつしやれ」に対して、『近松語彙』では、「垢を脱ぐ」とし、汚物を取り去る意であつて、汚名をすすぐこと、冤をすすぐことであるとしている。現在の「あかぬけ」とは大分意味が違ふ。しかし『俚言集覧』を見ると、「垢のぬけて清潔なる義なり、